

# 中世初期コルビー修道院（北フランス）の貨幣

——構築された貨幣史のもつれ——

山 田 雅 彦

## はじめに

貨幣をめぐる解釈は多様である。貨幣の特徴をどう捉えるのか、研究者の間では未だ一致した見方がないとさえ感じるときがある。もともと古銭情報を他の史料とつきあわせながら当該時代・当該地域の社会経済史を叙述する際には、当然研究者各々が持つ歴史観なり観点が強く影響するのだが、時にはそうした観点なり歴史観が個々の貨幣の見方そのものに作用しているケースも見られる。

ちなみにわが国では、1980年代以降、堀内一徳、森本芳樹らを嚆矢として中世初期貨幣史研究の重要性が指摘されてきたが、個々の貨幣記述の真偽まで含めて事例分析を再検討したものは、イングランド初期貨幣の詳細を検討した戸上一を別としてほとんど見られない<sup>1)</sup>。とりわけある特定の地域を取り上げて貨幣史分析を行うに際しては、複数ある貨幣カタログ類の情報そのものの再検討から始めなくてはならない。以下では、北フランスのコルビー修道院で製造されたと考えられる、あるいはそのように「考えられてきた」貨幣群、特に中世初期（10世紀以前）の貨幣をとりあげて、19世紀80年代から今日にいたる貨幣情報の変遷を考察していく。貨幣個々の次元で詳細なファクトファイルを作成する作業にも近いが、これにより貨幣史が抱える問題点が初めて見えてくることを事例から明らかにしていきたい。

## 1. シャルルマーニュ帝以前の時代にコルビー貨は存在したか

メロヴィング朝時代の貨幣史を総覧したメトコフによると、7世紀にガリア各地でローマ時代以来のトリエンズ貨 *triens* の製造が模倣されていた過程が知られる<sup>2)</sup>。また、7世紀の造幣地の所在を検証したブリュアンによれば、貨幣発行は司教座都市のほとんどの箇所

1) 堀内一徳1989「造幣人 (*monetarius*) と7世紀フランク王国の貨幣経済」『奈良史学』7号、82-90頁。森本芳樹2005「少額貨幣の経済史—中世前期におけるデナリウス貨—」同『西欧中世形成期の農村と都市』岩波書店、401-426頁。マーク・ブラックバーン（森本芳樹・高田倫子訳）2005「中世ヨーロッパ史の第一次史料としての発見貨」出土銭貨研究会編『貨幣に見るダイナミズム—欧・中・日比較の視点から—（第12回出土銭貨研究会大会報告要旨）』創研出版、35-50頁（著者原文：Coin Finds as Primary Historical Evidence for Medieval Europe も同報告書、7-34頁掲載）。戸上一1992『イングランド初期貨幣史の研究』刀水書房。

2) Metcalf, D. M. 2006, 《Monetary circulation in Merovingian Gaul, 561-674. A propos des Cahiers Ernest Babelon, 8》, *Revue numismatique*, t. 162, pp. 337-393.

実施されていただけでなく、一部の修道院所在地でも同様に行なわれていた。パリ北郊のサン・ドゥニ修道院、トゥールのサン・マルタン修道院、オセールのサン・ジェルマン修道院などがその代表例である<sup>3)</sup>。

ここで考察の対象とするフランス北部最古の修道院群の一つといえるコルビーのサン・ピエール修道院 abbaye Saint-Pierre de Corbie にもこの可能性がこれまで取りざたされてきた。同修道院は662年、メロヴィング朝フランク王国の王妃バティルドによって創建され、以後メロヴィング朝王権の手厚い庇護のもとで経済的にも優遇された<sup>4)</sup>。カロリング朝を迎えたのちも王家との関係は続き、カロリング行政に直接関わるような卓越した修道院長と聖人を輩出する<sup>5)</sup>。その影響力もあって、メロヴィング期からカロリング初期にかけては近隣に位置するアミアン司教からも自立する傾向にあったことが知られる<sup>6)</sup>。そして、社会経済世界の面でも多くの土地の寄進を受けて所領経済を繁栄させていたことも知られる<sup>7)</sup>。9世紀前半には国王シャルル禿頭より近隣にある橋の通貨税徴収権を管理する旨の文書も発給されており<sup>8)</sup>、そこからこの修道院が持つ経済力かつ政治力の大きさが推し量られることとなる。実際、これまでに発見された貨幣のいくつかはコルビーにおける貨幣製造を暗示するような情報を提供してきたのであり、間接、直接両面の証拠を前に、貨幣史家、古銭学者らはメロヴィング期、またカロリング初期のコルビー貨を議論してきている。

### 1—1. メロヴィング時代末期のトレミッシス貨

コルビー修道院が発行したとみられる貨幣のなかで、最初期の1枚は製造年代の正確な情報を欠いたトレミッシス貨 *tremissis*（もしくはトリエンス貨）である。同貨はポントン・ダメクールのコレクション——1888年まで活動したフランスの考古学者にして古銭学者ポントン・ダメクール氏のもとで計画された古銭情報総覧シリーズで、その死後（1888年）にフランス国立図書館 *Bibliothèque nationale de France*（以下 BnF と略記）に保管された貨幣群）——に含まれ、1890年に M. プルーによるメロヴィング時代貨幣総覧で初めて言及され

3) Bruand, O. 1998, 《Circulation monétaire et pouvoirs politiques locaux sous les Mérovingiens et les Carolingiens (du VIIe au IXe siècles)》, Société des Historiens Médiévistes (éd.), *L'argent au Moyen Age*, Paris, pp. 52–54.

4) Rouche, M. 1973, 《La Dotation foncière de l'abbaye de Corbie (657–661) d'après l'acte de fondation》, *Revue du Nord*, n° 210, pp. 219–226 ; McCormick, 2001, *Origins of the European Economy. Communications and Commerce, A.D. 300–900*, Cambridge, pp. 634, 697, 739.

5) Dom Grenier 1910, *Histoire de la ville et du comté de Corbie, des origines à 14e siècle*, Amiens; Ganz, D. 1990, *Corbie in the Carolingian Renaissance, Beihefte der Francia 20*, Sigmaringen, pp. 14–35.

6) Morelle, L. 2011, 《Les évêques d'Amiens et l'abbaye de Corbie jusqu'au milieu du XIe siècle》, *Bulletin de l'Association des amis de la cathédrale d'Amiens 2011*, pp. 6–8.

7) Cousin, Dom P. 1963, 《Les origines et le premier développement de Corbie》, *Corbie. Abbaye royale. Volume de XIIIe centenaire*, Lille, pp. 19–46; Ganz 1990, pp. 16, 26–27; Bruand, O. 2002, *Voyageurs et marchandises aux temps carolingiens. Les réseaux de communication entre Loire et Meuse aux VIIe et IXe siècles*, Bruxelles, pp. 61, 194, 206, 247.

8) Tessier, G. 1943, *Recueil des actes de Charles II le Chauve, roi de France*, t. 1, Paris, n° 18, p. 44.

た貨幣であるが<sup>9)</sup>、発掘地・発掘時期ともに正確な情報は不明である。コルビー修道院関連の初期貨幣群の詳細な分析はまずカステラン伯爵（19世紀末に古銭収集家にして古銭学者であった人物）によって行われたが、彼は分析を9世紀のものに限定しており、メロヴィング時代のものには一切触れていない<sup>10)</sup>。このコルビーのものとされたトレミッシス貨の分析を最初に手掛けたのは、1963年のP.ドゥブリエである<sup>11)</sup>。以下、その情報をもとにこの貨幣の詳細を見ていこう。

表に、+R.A.C.I. SC PETRI すなわち Ratio Sancti Petri の文字、右側に胸像が刻印されている。裏には、RCIO ECCLE すなわち Ratio Ecclesiae と読める文字が周囲にあって、二重十字が中央に配置されている。その銘から「サン・ピエール修道院」で製造されたことは判明するが、これがそのまま「コルビーのサン・ピエール」と読む決め手にはならない。

重量は1.20g。ドゥブリエ氏によると、6世紀末には1リブラ libra (327g) に82ソリドゥスが相当しており、従って1ソリドゥス solidus 貨=3.987g, 1トレミッシス貨=1.329g (1ソリドゥスの3分の1相当) であったとされる (ちなみにそれ以前は、72ソリドゥスで計算していたので、トレミッシス貨は1.5g とやや重かった)。この数値から、この「聖ピエール貨」がローマ皇帝の貨幣制度から大きく逸脱しないで、すなわち皇帝貨幣を擬制して造幣されたものと考えるのは、ドゥブリエの述べる通りである。

他方で、メロヴィング諸王の最初の貨幣に刻まれた刻印はローマ皇帝貨に倣った「勝利型」であったが、これが6世紀末に「十字架」にかわる。「聖ピエール貨」の十字架がこれに先行するか判断は困難だが、ドゥブリエとともに国王貨の変化と同時期、もしくは7世紀以降のことと考えるのが通常であろう。

この点につきプルーは、同貨を自著において、通番1116番、図XVIII中の30番を与えて揭示するが<sup>12)</sup>、この貨幣の胸像と、アミアンで製造されたクローヴィス2世の貨幣の胸像との類似を指摘している (同著の1107番、図XVIII中の25番)。しかも、このクローヴィス2世の後こそ修道院の創健者にして後に列聖されたバティルドであり、修道院における造幣活動の開始をその後に帰している<sup>13)</sup>。

9) Prou, M. 1890, *Inventaire sommaire des monnaies mérovingiennes de la collection d'Amécourt, acquises par la Bibliothèque nationale*, Paris, n° 704. このトレミッシス貨以外にも以下で議論する主要な貨幣が、1962年、コルビー修道院創建1300年記念の宝物展覧に際して展示された。この一覧については、Lafaurie, J. et Duplessy, J. 1962, 《Numismatique》, Société des antiquaires de Picardie, *Les trésors de l'abbaye royale. Saint-Pierre-de-Corbie, Musée de Picardie, Amiens, Exposition, 6-24 mai 1962, Bulletin trimestriel de la société des antiquaires de Picardie*, Amiens, pp. 45-47.

10) Castellane, Comte de 1916, 《Observations sur le monnayage de Corbie au IXe siècle》, *Revue numismatique*, t. 20, pp. 193-213.

11) Doublier, P. 1963, 《Le monnayage de l'abbaye Saint-Pierre de Corbie》, *Corbie, abbaye royale. Volume du XIIIe centenaire*, Lille, pp. 283-284.

12) Prou, M. 1892, *Les monnaies mérovingiennes. Catalogue des monnaies françaises de la Bibliothèque nationale*, t. 1, Paris, p. 245, n° 1116 et PL. XVIII, n° 30.

13) Prou 1892, p. 243, n° 1107 et PL. XVIII, n° 25.

これによれば、造幣開始の時期は7世紀後半から末の頃となろう。しかし他方で、ドゥブリエ氏は同貨裏面に刻まれた十字架が後代カロリング時代のデナリウス *denarius* 銀貨の十字型の銘に類似しているとの特徴を見みとり、同貨の製造時期をカロリング朝期に近い時期、すなわち8世紀半ばまで遅らせようとしている<sup>14)</sup>。

とはいえドゥブリエは、コルビー修道院で創建期から造幣が行われていたことについて、もう一つの状況証拠を引き合いに出す。それは前述したように7世紀ガリアの多くの教会機関で金貨製造が行われていた事実であり、北フランス一帯では、ノワイヨン教会やサンリス教会で聖メダールの名を刻んだ聖人銘の貨幣製造が実施されていたし、修道院でもトゥールのサン・マルタン、パリ北郊のサン・ドゥニで造幣が行なわれていたことが知られる<sup>15)</sup>。それでもドゥブリエは、この「聖ピエール貨」をコルビーに帰すことにはやはり慎重である。正確な発見地が不明であり、聖ピエールの名を冠した修道院が当然他に存在することから、コルビー修道院製造のものかどうか決定的なことは言えないのである<sup>16)</sup>。

この慎重な態度は、1985年刊行のデュプレッシによる『フランス発見の中世及び近世貨の埋蔵一覧、第1巻、751-1223年』でも継承される。そこにはコルビーのメロヴィング朝下での貨幣に関する言及は一切ない<sup>17)</sup>。さらに90年代の新しい埋蔵結果、フランス国外の埋蔵報告をも加味してコルビー貨の総合的検討を再度実施したボンペール（1998年のクレラン、プロ、ゲッラら、古銭学者・科学者との連名論文）もまた、この聖ピエールとの関係のみではコルビー修道院と結びつけられないと述べるにとどまる<sup>18)</sup>。

なお、6世紀から7世紀のガリアの貨幣流通の全体的傾向に関する書評論文をまとめたメトコフもソワソンの「聖メダール貨」には言及しても、コルビー貨には言及していない<sup>19)</sup>。そもそもこのアミアンからポンティウに至る一帯で当時最重要の貨幣が存在していた。カントヴィック貨、もしくは初期の名称からすると「ヴィック貨」が7世紀を通して、さらに8世紀にかけてもなお十全に機能していたのであり<sup>20)</sup>、その意味ではコルビー地方はその直接の影響下にあった可能性はある。また、近隣のアミアン市においても造幣が行われていたことを忘れてはならない<sup>21)</sup>。

14) Doubriez 1963, p. 284.

15) Prou 1892, pp. 73-80 (Saint-Martin de Tours), 181-183 (Saint-Denis), 235 (Noyon), 241 (Senlis). さらに前注3も参照。

16) Doubriez 1963, p. 284.

17) Duplessy, J. 1985, *Les trésors monétaires médiévaux et modernes trouvés en France*, t. 1, 751-1223, Paris.

18) Bompaire, M., Clairand, A., Prot, R. et Guerra M.F. 1998, 《La monnaie de Corbie (XIe-XIIe siècles)》, *Revue numismatique*, t. 153, p. 297.

19) Metcalf 2006, pp. 360, 366-367, 389.

20) メロヴィング時代のカントヴィック貨と考えられる Wic (Vicus) in Pontio の貨幣の最初のまとまった情報は、Prou 1892, pp. 245-249にある。その後発見されたものや個々の分析に関する文献については、さしあたり拙稿2015「カントヴィック研究の過去と現在（上）—ドントによる問題の整理と継承—」『史窓』72号、85頁掲載の「銭貨資料情報」を参照。

21) Prou 1892, pp. 243-244.

## 1—2. ピピン短軀王（752—768年）、さらにシャルルマーニュ（768—814年）の銘を刻む「聖ピエール」のデナリウス

コルビー修道院のものとされてきた貨幣で、次に古いのがピピン短軀王時代のデナリウス貨である。貨幣の重量は1.39gである。ピピン以前の1リブラは25ソリドゥスで、1ソリドゥスが12デナリウス、そこから1デナリウスの重量は理論上1.08～1.09gであったが、ピピンがカロリング朝期最初のデナリウス貨の再評価を行ったことで、以後の1リブラに22ソリドゥスが対応し、理論上1デナリウスの重量は1.23gとなっていた。本貨の重量の違いは当時からすれば誤差の範囲におさまるものと考えられる。国王の銘もあって、ドゥブリエも認めるようにこの貨幣が公式な基準に則って製造されたものであることは疑いない<sup>22)</sup>。

銘の特徴は、表に R.P. の文字があり、これは Rex Pipinus の略号であると見て取れる。文字それぞれの下には小さな球が配されてもいる。裏面には、二行にわたり SCI（S字は横向き）と PETRI もしくは PE RI（T字が欠損）とあり、これが「聖ピエール」を指していることは確かであろう。しかし、この銘だけをもって「コルビー」の聖ピエールと判断をすることはできない。

他方で、同じタイプの貨幣はこれ以外にも他数発見されてきている。1993年刊行のデペイロによる『カロリング期の通貨、貨幣大全』によるならば、6点がこれまで確認されている。上記に触れた1点と他5点の銘はほぼ同じである。重量は1.31gから1.39gの範囲内におさまるが、それぞれ微妙に異なる。ただしこれは使用によって生じた摩耗による誤差の範囲と見なすことはできなくない。

6点のうち2点は個別発見（1点はBerlinにあるCabinet de la monnaie et des médailles, Staatliche Museen zu Berlin—以下Berlin所蔵、他1点はパリのBnF所蔵で、プルーのカタログに言及）だが、他4点は「アンフィ埋蔵」〈Trésor d'Imphy〉（ブルゴーニュ北西部のヌヴェル Nevers から南東10km、1857年発掘実施）からまとまって出土したもので、768—794年に埋蔵されたものと推定されている<sup>23)</sup>。埋蔵の内容は、1967年に刊行されたアメリカの考古学者モリソンとグランサル共編の『カロリング期の造幣』が簡潔にその内容をまとめているが<sup>24)</sup>、さらに1985年のデュプレッシが詳しい。デュプレッシは、「アンフィ埋蔵」の内容を詳述する項目で、ピピンの「聖ピエール貨」を、後述のシャルルマーニュの「聖ピエール貨」とともにコルビーの製造貨として処理している<sup>25)</sup>。

ここまで、モリソン・グランサル、デュプレッシ、デペイロと各種の総覧を作成した古銭研究者はこの貨幣をカロリング期のコルビー貨のうちに分類しているが、しかしこの分類は

22) Lafaurie et Duplessy 1962, p. 45 ; Doubriez 1963, pp. 284 – 285.

23) Depeyrot, G. 1993, *Le numéraire carolingien. Corpus des monnaies*, Paris, p. 242, n° 365.

24) Morrison, F. and Grunthal, H. 1967, *Carolingian coinage*, New York, pp. 339 – 341. モリソンとグランサルのピピン時代のコルビー貨についての項目は, *ibid.*, p. 75, n. 11.

25) Duplessy, 1985, p. 74.



銘の「聖ピエール」をコルビーのそれと同一視して初めて可能なことである。この点で実はドゥブリエの姿勢は慎重であった。ドゥブリエはその問題とは別に、この時代の通常の貨幣銘記や王自身の称号は Pipinus rex の順であり、他のメロヴィング・カロリング諸王も同様であったことを気にかけて、この銘自体の例外性に言及している<sup>26)</sup>。むしろ彼は当該貨の正貨としての信憑性まで疑っているのではないが、これをコルビー貨と断言することには躊躇があったことだけは確かである。また、カロリング貨幣総覧をまとめた研究者のなかで、ブルーのみが造幣地をコルビーに特定せず、造幣地不明と分類している<sup>27)</sup>。1998年に11世紀以降のコルビー貨幣に焦点を当てたボンパールらも、カロリング期に関する箇所は概略的な記述にとどまり、「アンフィ埋蔵」から出てきた4枚のデナリウス貨に限って検討しているが、基本的な考えはブルー、ドゥブリエの見解と同じである<sup>28)</sup>。

「ピピンのコルビー貨」と同じことが「シャルルマーニュのコルビー貨」にも言える。この貨幣は93年のデペイロの総覧によると、3点確認されるという。いずれも表にシャルルマーニュの名を CARO、及び LVS と二行にわたり刻み、裏面は一行で SPTE を刻印する（S字は横向き）。後者はやはり Sanctus Petrus、すなわち「聖ピエール」と読み取れる<sup>29)</sup>。これをガリエルはコルビー貨とし<sup>30)</sup>、以後デュプレッシ、デペイロは引き続いてコルビー貨に分類する<sup>31)</sup>。3点の内2点が埋蔵貨（「アンフィ埋蔵」1点、781-800年頃の「クリンクベルク埋蔵」〈Trésor de Krinkberg〉1点）、他1点がトリアーからの個別発見貨である。デペイロにおいてはさらにもう1枚、同じくトリアー個別発見貨の、表面に同じくシャルルマーニュの名を CARO、LVS と二行に、裏面に S PET TRE が十字型に刻む貨幣を挙げている。

しかし、これらの扱いについて今度はブルーだけでなく、モリソン・グランサルも造幣地を特定不能に分類している<sup>32)</sup>。ドゥブリエがブルーの慎重な見解を踏襲している<sup>33)</sup>のは言うまでもない。ボンパールらも、アンフィの1枚に限る言及とはいえ、聖人の銘だけからコルビーに特定するのは困難と判定している<sup>34)</sup>。彼らが口をそろえて述べるのは、シャルル禿頭王時代からの Sancti Petri Moneta の銘こそが明確にコルビーでの発行を裏付けるということである。

シャルルマーニュ帝の次の時代、ルイ敬虔帝の「聖ピエール貨」は、現在のところ発見されていない。これまで名を挙げた研究者の誰一人としてそれには言及していない。

26) Doublier 1963, p. 285.

27) Prou, M. 1896, *Les monnaies carolingiennes. Catalogue des monnaies françaises de la Bibliothèque nationale*, t. 2, Paris, p.130, n° 928.

28) Bompaire et al. 1998, pp. 297-298.

29) Depeyrot 1993, pp. 142-143, n° 366, 367.

30) Gariel, E. 1883, *Les monnaies royales de France sous la race carolingienne*, Strasbourg, p. XX

31) Duplessy, 1985, p. 74, n° 169 ; Depeyrot 1993, pp. 142-143, n° 366, 367.

32) Morrison/Grunthal 1967, p. 120, n° 294.

33) Doublier 1963, p. 285.

34) Bompaire et al. 1998, p. 298.

## 2. 9世紀後半から10世紀初めのコルビー修道院製造の貨幣

シャルル禿頭王時代にはいると、フランク王国では「神の恩寵による国王」〈Gratia Dei rex〉銘の貨幣が基本のスタイルとなってくる。そして裏面に造幣地の名が当地を象徴する文様等とともに刻まれる。そこに明示的に「コルビー」の名が表された貨幣に出会うのが、ようやくこのシャルル禿頭王の時代なのである。ガリエルのリストにすでに2枚が取り上げられている<sup>35)</sup>。知られている硬貨の数は単発的で少ないものの、それでも9世紀半ばから10世紀初頭まで、以下に詳細を示すように連続して貨幣がコルビーで製造された様子が確認されている。

BnFの貨幣部門に所蔵される数枚を見ても、シャルル禿頭王<sup>36)</sup>、ルイ吃音王 (BnF, monnaie 243A)<sup>37)</sup>、シャルル肥満王 (BnF 243B)、ウード王 (BnF 244,244B) と9世紀末の歴代の国王のもとで連続して製造されたことがわかり、さらに、国王名のない硬貨として、修道院長フランコン Francon (在位890年頃から912年) の名のモノグラム入りのものの発行さえ確認されている (BnF 244A, C ; BnF Féodale 49)。その後は突然コルビー貨の情報が途絶えてしまうのは一つの謎だとしても、50年あまりに及ぶ期間での連続しての発行は確実にみて良い。以下、年代順にその特徴を見ていく。

### 2-1. 疑いの余地のない最初の証拠—シャルル2世禿頭王時代 (840-877年) の貨幣

コルビーと関連する3番目に古い貨幣は、シャルル禿頭王のデナリウス貨である<sup>38)</sup>。表面には、周囲に+CRATAD-IREX, 中央に KAROLUS の組み合わせ文字 (モノグラム) を、裏面には、周囲に+SC-IPETRIMONETA, 中央に十字架をそれぞれ刻印した、典型的なピトル勅令型刻印の貨幣<sup>39)</sup>である (もっともピトル勅令ではコルビーは造幣地として明示されているわけではないが)。重さは1.23gと軽めだが、この程度の重量がここから50年間のコルビー貨においてはむしろ平均的な数値である。コルビー近辺ボーヴ・カントン canton de Bove 内の「グリジー埋蔵」〈Trésor de Glisy〉<sup>40)</sup>で1865年に発見された1枚の貨幣で、ガリエル、ブルー双方により同じ箇所出土した同類の貨幣とともにカタログ化されている<sup>41)</sup>。

35) Gariel 1883, p. 246.

36) Prou 1896, p. 135, n° 961.

37) フランス国立図書館貨幣・メダル部に所蔵の貨幣で、Gallicaのサイトで閲覧可能である。

38) Castellane 1916, pp. 210-211; Lafaurie et Duplessy 1962, p. 45.

39) ピトル勅令と当時の貨幣については、Lafaurie, J. 1970, 《Numismatique. Des Carolingiens aux Capétiens》, *Cahiers de civilisation médiévale*, t. 13, pp. 117-137; Id. 1980, 《La surveillance des ateliers monétaires au IXe siècle》, W. Paravicini et K. F. Werner (éd.), *Histoire comparée de l'administration (IVe-XVIIIe siècles)*. Actes du XIVe colloque historique franco-allemand de l'Institut Historique Allemand de Paris (Beihefte der Francia, 9), Munich, pp. 486-496を参照。

40) この埋蔵の地域的な性格については、Vercauteren, F. 1934, 《L'interprétation économique d'une trouvaille de monnaies carolingiennes faite près d'Amiens en 1865》, *Revue belge de philologie et d'histoire*, t. 13, pp. 750-758を参照。

41) Gariel 1883, p. 246, n° 231, pl. XXXIV 231; Prou 1896, p. 135, n° 961.

モリソン・グランサルもこのグループのものとして5枚を挙げている<sup>42)</sup>。

この他、シャルル禿頭王時代のコルビーでは、オボルス obolus 貨も製造されていた。すでにガリエルもこれを挙げ、モリソンも踏襲している<sup>43)</sup>。「コンピエーニュ埋蔵」〈Trésor de Compiègne〉(1877年出土)のもので、銘はデナリウスのそれと変わりはないが、重量はおよそ0.69gとデナリウスの半分程度しかない。同じ打ち型を使用しながら、明らかに金属量を意図的に抑えた「軽めの」貨幣、すなわちオボルス貨が作られていたことは確実である。

以上のシャルル禿頭時代に関する情報は、93年刊行のデペイロによる通貨総覧でより豊かになる。まず禿頭王時代の上記のコルビー・デナリウス貨の枚数は合計10枚とされ、上記のタイプが若干の変形を含みつつ8枚、そしてそれ以外に、裏面の十字架がAもしくはVの字で囲まれているタイプのものを2枚あげている。1枚はBnF蔵の個別貨、他1枚は879-884年埋蔵の「アングリユール埋蔵」〈Trésor d'Anglure〉(1900年発掘、マルヌ県エペルネー近傍)由来のもので、重量は1.39g~1.40gと先のタイプと大差はない。デペイロではまた、オボルス貨も2枚が数え上げられ、コンピエーニュ以外にBerlinに所蔵される1点が言及されている<sup>44)</sup>。

ちなみに、古文書学者ルヴィアンはかつてカステラン伯爵を批判して、シャルル禿頭時代のコルビー貨について、当該KAROLVSを「シャルル3世単純王」のシャルルと読むことで、シャルル禿頭期の修道院での造幣を認めていない。彼はコルビー修道院による「造幣権」の獲得時期を早くて9世紀末に位置づける<sup>45)</sup>。しかし実際に発掘された貨幣埋蔵の時期にもとづく限り、この「シャルル」を「シャルル単純王」と考える方が困難であろう。

## 2-2. 「ルドヴィクス王」の「聖ピエール」貨の特定問題

ルイ（ルドヴィクス）の銘とサン・ピエールの銘のあるデナリウス貨が、1962年の展覧会でもコルビーの第4に古い貨幣として公開されている<sup>46)</sup>。表面周囲に、MISERICORDIA D-IREXの字が取り囲み、中央にはLUDOVICUSのモノグラムが配されている。周囲銘文は貨幣特有のギザギザ線（grènetis）で囲われてもいる。裏は、中央に十字架。囲みの銘はSCI PETRI MONETAで、同じくギザギザ線で囲まれている。来歴ははっきりとしており、877-882年ものを含む「サヴィニエ埋蔵」〈Trésor de Savigné-sous-le-Lude〉（ロワール川に近いアンジェとル・マンの間に位置）由来の出土品（1899年発掘）で、カステラン伯爵が購入し、分析の後にBnFに寄贈されたものである（BnF 243a）。重量は1.65gと先のシャル

42) Morrison/Grunthal 1967, p. 199, n° 770.

43) Gariel 1883, XXXIV, 232; Morrison/Grunthal 1967, p. 199, n° 771.

44) Depeyrot 1993, p. 143.

45) Levillain, L. 1902, *Examen critique des chartes mérovingiennes et carolingiennes de l'abbaye de Corbie*, Paris, p. 204. ここで言うカステランの論文とは、Castellane, Comte de, 1900, 《Denier de Corbie au type de Louis le Bègue》, *Revue numismatique*, t. 4, pp. 435-438である。この内容はこの後引用することになる。

46) Lafaurie et Duplessy 1962, p. 45.



ル禿頭のコルビー・デナリウス貨より若干重い<sup>47)</sup>。また、1900年発掘の「アングリュール埋蔵」からも同貨がもう1枚発見され、ともに、ガリエルのリスト作成時には知られていなかった貨幣である<sup>48)</sup>。

このデナリウス貨に「コルビー」の名称はない。しかし、購入したカステラン伯爵はこれらの外層的特徴と歴史的背景を総合的に判断して造幣地をコルビーと判断した。彼によると、この貨幣の刻印字とこの後触れる898年前後の修道院長フランコン（在位890年頃から912年）の貨幣の CORBIENSIS の刻印字との類似性が認められること、具体的には、フランコンの貨幣にある SCI PETRI MOI のうち、MとPがこの貨幣のとの間で類似している、さらに同じ十字架や同じギザギザ線が認められるというのである。

ちなみに、1896年の段階でブルーは、カロリング初期の貨幣に関する分析と同じ理由で、この貨幣をコルビーのそれとは認めず、カタログでも特定不能に分類している<sup>49)</sup>。前述ルヴィアンも当初はブルー説を支持したが、その後カステラン伯爵と書簡をやりとりするなかで、ルイ吃音王時代のコルビー貨の可能性を自著の補遺で認めているのは興味深い<sup>50)</sup>。

ただし、この貨幣の銘の特定もまた本来的な問題を含んでいる。というのも、この LUDOVICVS が877-879年在位のルイ2世吃音王なのか、その息子で879-882年に主にネウストリアを統治した——正確には当初は弟のカルロマンと共同統治し、後に分割統治を行った——ルイ3世なのかは解決できないのである。カステラン伯爵とルヴィアンはこれをルイ吃音王に同定し、1963年のドゥブリエもそれに応じているが<sup>51)</sup>、モリソン・グランサルはリストはBnF所在のものが挙げて、両方の可能性を示唆している<sup>52)</sup>。その後、デペイロは各地の貨幣の型を比較総合分析する中で、BnF所蔵品にサヴィニェ埋蔵出土の1点、「アングリュール埋蔵」出土1点を加えた合計3点に言及しつつ、ルイ3世の時代のものと見なしている。サヴィニェ埋蔵貨幣群が両方の国王在位期に関わるため断定はできないが、シャルル禿頭王とルイ吃音王時代の貨幣の銘がともに GRATIA を打ち、ルイ3世から次のシャルル3世期までの王貨が GRATIA ではなく MISERICORDIA を用いる傾向があるという傾向を見て取ることで、デペイロはこの貨幣をルイ3世期のものに分類したとみられる<sup>53)</sup>。

この見方に従うならば、次のシャルル3世肥満王の時代のコルビー貨は存在しないということになるが、果たしてどうであろう。次項ではこの点に関わる先行研究の叙述を整理していく。

47) Castellane 1900, pp. 435-436.

48) Ibid., pp. 437-438.

49) Prou 1896, p. 135, pl. XXII, n° 961.

50) Levillain 1902, pp. 342-343.

51) Doublier 1963, pp. 289-290.

52) Morrison/Grunthal 1967, p. 270, n° 1244.

53) Depeyrot 1993, p. 143; type de 864-875, type de 879-887.

### 2—3. シャルル肥満王時代（884–887年）にもコルビー貨は発行されたか

884年12月にルイ3世の共同統治者であったカルロマンが亡くなり、西フランクの男子直系が絶えることとなった後、フランキアの有効貴族層は東フランクのカルル肥満王を西フランク国王としても選出した（これを西フランク的には「シャルル肥満王」と称す）。一時的に帝国の統一が実現したが、その治世は安定することなく、シャルルは887年11月自らが招集したトリブール帝国集会の場で有力貴族たちによって廃位されている<sup>54)</sup>。

西フランク王としては短い期間だが、シャルル肥満王期のもものと目されるコルビーのデナリウス貨が問題にされてきた。表の銘は、+GRATIA D-I REX の文字で囲まれ、中央には国王名 KAROLUS のモノグラムが刻まれる。裏には、+SC PETRI MONETA の文字を周囲に配して、やはり中央にはV、もしくは横線のないAの文字で枠づけられた十字架がおかれているというものである。「アングリユール埋蔵」から発見されたもので、重量は1.39gである。

ここまでの記述から、これが既に言及したシャルル禿頭王時代のデナリウスの第2類型と一致していることが理解される。実は同じ貨幣が、型を重視するモリソン・グランサル、ならびにデペイロによってはシャルル禿頭時代のもものと読まれる一方で<sup>55)</sup>、他の論者、ドゥブリエしかり、比較的最近のボンパールらによってはシャルル肥満王のものとして読み取られている<sup>56)</sup>ことに注意する必要がある。

J. ラフォーリーとJ. デュプレッシもまた、展覧会リストの短い説明ながら、十字架にかかるVは「横線無しのA」と読むべきとして、このAはコルビー修道院長アンジルベル（アンギルベルトゥス）Angilbert のイニシャルの可能性があるとという<sup>57)</sup>。この見解を踏襲したドゥブリエに拠ると、アンジルベルは院長ウード Eude がボーヴェ Beauvais 司教となるべく修道院を去った859年に一時コルビー修道院長に就任するが、862年以降長きにわたり院長職を離れていた人物である。ところがその後、878年8月に彼は再び修道院長に就任し、890年2月に同地で没するまでその職にあった。この貨幣をこの後半の修道院長時代である878–890年の貨幣と考えようとする場合、銘のシャルルはまたもやシャルル肥満王を指すことになる<sup>58)</sup>。ドゥブリエ後、ボンパールらもこの見方を採用している<sup>59)</sup>。

もっとも、デペイロもまたこの貨幣の一つについてアンジルベル（もしくはその前任者ウード=ODO）による造幣との注を付している<sup>60)</sup>が、それでも彼がこの貨幣をシャルル禿頭時代のもものと読むのは、859–862年の短い間とはいえ、シャルル禿頭とアンジルベルの治

54) Govry, I. 2012, *Louis III, Carloman et Charles le Gros*, Paris, pp. 27–29, 42–43.

55) Morrison/Grunthal 1967, p. 199, n° 771; Depeyrot 1993, p. 143.

56) Doubiez 1963, pp. 290–291; Bompaire et al. 1998, p. 298.

57) Lafaurie et Duplessy 1962, p. 45.

58) Doubiez 1963, p. 291.

59) Bompaire et al. 1998, p. 298.

60) Depeyrot 1993, p. 143, ns. 352, 353.

世が一致するからであろう。ただし、この型の貨幣が864年のピトル勅令以前に完全に定着していたか、という別の問題も生じることとなるし、貨幣銘の型がシャルル禿頭とシャルル肥満王でほぼ同じものであったとしてもそれ自体不思議な現象ではないともいえる。その点では銘の型のみで、「シャルル」をシャルル禿頭王に一本化するデベイロらの見解は斥けることが不可能ではないだろう。9世期の末に向かって漸次的に貨幣の重量が軽くなる傾向があるなかで、この貨幣が持つ1.39gは比較的重いというのもさほど大きな障害にはならない。それは誤差の範囲でしかなく、次に見る貨幣群もまたほぼ同量の重量を保っているのである。

しかし、ドゥブリエによって引用され、見解を使用された前述のデュプレッシは、1985年にフランスの埋蔵のリストを作成した際、この貨幣を含む「アングリユール埋蔵」についての項目では、モリソン・グランサル、デベイロらと同じ古銭学・貨幣考古学的な見方に立っているように見える。同リストではアンジルのコルビー貨幣はシャルル禿頭王の時代のもんとして記述されている<sup>61)</sup>。おそらくは「アングリユール埋蔵」が含む全体構成を見たときに、シャルル肥満王の時代まで埋蔵物年代を下げることの方が難しかったのではないかと推察できる。

以上、ここ最近の古銭学的見解を総合して、このタイプの貨幣は（2点のみだが）シャルル禿頭王時代のデナリウス第2類型に割り振っておきたい。

## 2—4. コルビー製造のウード王（887—898年）のデナリウス貨、そして修道院長フランコン（895—912年）のデナリウス貨

シャルル肥満王の廃位の後、新しく西フランクの国王に選出されたのは、かつてノルマン人との戦いで名声を博したロベール・ル・フォールを父とする人物、ウード Eudes（オド Odo）である。父はシャルル禿頭王からネウストリア辺境伯を任され、866年にブリッサルトの戦いでノルマン人を撃退し戦死するが、その後も父の義兄弟ユーグ・ラベがセヌ・ロワール間地域の dux を名乗るとともに、トゥールのサン・マルタン修道院とマルムーティエの修道院長を兼任するなど、ウードの一門は860—70年代の頃からフランキアの大立て者として活動していた豪族家門である<sup>62)</sup>。

BnF にはウード王でのもとで発行されたコルビー貨のデナリウスが2枚所蔵されている。そのうちの1枚は、表面は、中央に十字架、周囲に HODO REX F の銘をもち、裏は、周囲に CORBIENSI, 中央には F と R が背を向けた格好のモノグラムと十字架が組み合わされ、当の十字架は上部まで伸びている。重量は1.33～1.34g。この時代の標準と言える<sup>63)</sup>。この貨

61) Duplessy 1985, p. 27.

62) Govry, I. 2005, *Eudes. Fondateur de la dynastie capétienne*, Paris, pp. 33–65.

63) Prou 1896, p. 38. n° 244. プルーのテキストは、1996年刊行後も基本的なカタログとして使われ続けており、追加の情報が BnF 所蔵版に随時書き加えられている。この貨幣についても n° 244a として書き加えがある（BnF Gallica が公開する Prou 同書を参照）。

幣は、その後もドゥブリエ、モリソン・グランサル、デペイロによっても列挙されている<sup>64)</sup>。デペイロによると、その後同形の貨幣は他に3枚確認され、コルビーからさほど遠くはないアラス近傍の「モンシー・オ・ボワ埋蔵」(Trésor de Monchy-au-Bois)の出土物(1869年)とするが、正確には2枚である。同埋蔵にはシャルル禿頭からルイ2世、もしくはルイ3世を経てウード治世に至る9世紀後半の北フランス各地の地名を含んだ貨幣が476点含まれていることが、デュプレッシにより詳述されている<sup>65)</sup>。その内容を見る限り、ウードのコルビー貨が2枚あるのに比して、他に貨幣1枚だけの造幣地が28箇所、2点ものも9造幣地とあて、コルビーの貨幣が少なくとも通常の貨幣として他の有力な貨幣とともに広く北フランス一帯で使用されていた様子をうかがい知ることができる。

他方、BnFのもう1枚の方の表面は、周囲に+HODO REX FRANがあるのは前者と同じだが、FとRが背を向け合った格好のモノグラムと十字架の組み合わせが今度はこの表面の中央に配されている。裏は、+CORBIENSISの文字と中央の十字架である。重量は、前者より少し軽く1.24~1.25gしかないが、これは誤差の範囲といえる。こちらは、ガリエル<sup>66)</sup>だけでなく、カロンによって「国王貨」ではなく「封建貨」の例として取り上げられているのは当時の歴史意識による<sup>67)</sup>。その後、プルーによっては取り上げられないが(カロリング国王貨を対象としたカタログならでは!)、ドゥブリエ、モリソン・グランサル、デペイロのいずれでも、ウード時代のコルビー貨として列挙されている<sup>68)</sup>。後2者のリストに拠れば、これらは現在BnF所在のもの以外に、Berlin所在の1枚が確認されている(こちらは1.27gの重量)。

ところで、十字架を挟んで背中合わせのFとRの文字はFrancorum Rex「フランク人の国王」の省略と自然に解釈するべきであろうが、カロン、プルーらはむしろこの文字をFranconの略記、すなわち修道院長フランコンのイニシャルを読み取ろうとした。ドゥブリエもこの流れに乗っている<sup>69)</sup>。フランコンは、ウード時代、895年から修道院長となった人物である。すでに国王ウードの銘の刻印は他の箇所ではなされているだけに、そこにもう一つの意味合いをそこに読み取ろうというのである。彼はただし「二重の意味合い」という微妙な表現を論文では使用することで、意図的にこの貨幣を「国王貨」types royauxから「封建貨」types féodauxへの移行を象徴する素材と位置づけている。ドゥブリエは、フランコンが国王貨の形式を保ちつつも、すでに自身の名を刻み始めていたというのである。

64) Doublier 1963, pp. 291 – 292; Morrison/Grunthal 1967, p. 275, n° 1272; Depeyrot 1993, p. 143, n° 373.

65) Duplessy 1985, pp. 87 – 88.

66) Gariel 1883, pl. XLVI, n° 24.

67) Caron, E. 1882, *Les monnaie féodales françaises*, Paris ; réimp Bologne, Forni, 1974, p. 372, n° 620.

68) Doublier 1963, pp.291 – 292; Morrison/Grunthal 1967, p. 275, n° 1271, Depeyrot 1993, p. 143, n° 372.

69) Doublier 1963, p. 292.

それ以前には1936年にディウドンネが自身フランスの封建貨をまとめた際には、彼はFとRに「フランク人の国王」以外の読みを認めずこれを逆に封建貨に分類していない<sup>70)</sup>。モリソン・グランサルとデュプレッシもこの見方に沿っている<sup>71)</sup>。しかし、1993年のデペイロはドゥブリエよりも過激にフランコン貨説に与し、封建貨の型に分類している<sup>72)</sup>。

ドゥブリエとデペイロのニュアンスは異なっている。しかし、両者がともにF・Rをフランコンと解釈しようとするのは、同時期に彼自身の名で製造された明白なフランコン貨が存在し、ウード後のシャルル3世単純王の時代になっても続けられていたことが知られるからである。

表面周囲には、+SCI PETRI MO（もしくはMOI）の銘、中央には十字架にFとRの背中合わせの組み合わせ文字がある。裏面周囲には、+CORBEIENSISの銘、中央には十字架が描かれている。所蔵は、BnFの個別貨として2点（no 244b, Meyerコレクション蔵no 378；no 244C, Du Lacコレクション蔵no 533）、さらにアラス近傍の「モンシー・オ・ボワ埋蔵」より5枚が確認される。デペイロはカロン記載の5枚を加えて12枚とするが、来歴は記載していない<sup>73)</sup>。ただし、ボンペールらによると、この5枚は「コンピエーニュ埋蔵」の出土とされている<sup>74)</sup>。現在の刊行物の状態では、重量はBnFの2枚についてのみ1.29gと1.39gと判明する。これまで見てきた他の型の重量とさほど変わらないものである。

発行時期に関しては、ドゥブリエはウード王の名前が見られないことから、シャルル3世の時代のものとするが<sup>75)</sup>、すでに修道院長名で発行していることが重要ならば、これは議論になっていない。その特定の問題は、すでに貨幣考古学の領域を超えて歴史叙述の領域との関わりが強くなってくる。しかし、ボンペールらは「モンシー・オ・ボワ埋蔵」の年代からもう少し早い時代のものと考えている<sup>76)</sup>。

以上がコルビー修道院のカロリング時代以前の貨幣情報のすべてである。なお、シャルル3世単純王以降の国王の名をコルビーの名とともに刻んだ貨幣は現在まで発見されていない。19世紀以来のどの貨幣カタログ・リストにも、また先行研究にもその言及はない。もっともシャルル3世については、場合によってはこれまでシャルル禿頭王のものと考えられてきた型の貨幣が、同じ型で製造されただけで、一見しては判別しがたいと考えることも不可能ではないが、その検証はフランク王国全域の貨幣情報とも比較しながら見ていくべき検討課題である。その際、非破壊分析等のより科学的な検証作業が欠かせないであろう。

70) Dieudonné, A. 1936, *Manuel de numismatique française*, t. IV, *Monnaies féodales*, Paris, 1936, pp. 327–328, 217.

71) Morrison/Grunthal 1967, p. 275, n° 1271; Duplessy 1985, p. 88, n° 217.

72) Depeyrot 1993, p. 143, n° 372–373.

73) Depeyrot 1993, p. 143, n° 374; Caron 1882, p. 372, n° 621, pl.XXV, n° 15.

74) Bompaire et al. 1998, p. 298.

75) Doubriez 1963, pp. 291–293.

76) Bompaire et al. 1998, p. 298.



### 3. カロリング朝の政治経済を映し出す鏡としてのコルビー貨

コルビー修道院で貨幣の製造が再び確認されるのは、ウードの死から150年以上を経た後の時代である。11世紀後半から12世紀にかけてのコルビー貨もまた興味深い情報に満ちているが、今回は対象外とし別稿をこの検討に充てたい。代わって以下では、これまでの貨幣情報からどのようなカロリング期コルビー貨幣の歴史を構築することが可能なのか、あるいは否なのかについて見ていきたい。

そもそもメロヴィング朝期のコルビーで造幣が認められていたのかどうか、同じくカロリング初期のピピン、シャルルマーニュ、ルイ敬虔王等のもとでそうであったのか、この問題についてはこれまでの所、多くの研究者がいくぶん懐疑的である。とりわけこれらの貨幣をとりまく歴史的状況をあわせて検証したドゥブリエの否定的立場はわかりやすい。貨幣にある銘は「聖ピエール」のみで、どの土地のものかは不明。政治的に見てもピピンの頃から帝国全域で貨幣統制が強まり、カロリング王家に従順であったコルビー修道院が「偽造」「模造」という悪癖に関わるはずがないという見方であった。9世紀前半の高名な修道院長で、シャルルマーニュの血縁者にして宮宰も務めたアダラルという人物が知られるが、この人物は822年に修道院の『規則集』〈Statuta〉を編纂している。そこでは修道院に関わる物的事柄、組織の詳細が述べられるにもかかわらず、貨幣や造幣に関する記述は一切含まれていないのはこの点で示唆的である<sup>77)</sup>。

たしかにカロリング朝初期国王は、王国（帝国）内での造幣を厳格に管理するべく、メロヴィング期の造幣人の名を刻む慣行を廃して、貨幣に国王の組み合わせ文字（モノグラム）を刻ませ始める。また、彼らは貨幣の重量と外観をカピトラリア法制によって詳細に定めている。造幣所の数の削減は最も力を入れた政策の一つで、シャルルマーニュは、804年のティオンヴィルの勅令8章で、「宮廷における造幣可能のみ認め、正義と法令に反して数多で行われている偽造については、余による別の定めのない限りは、他のいかなる地においても造幣はなされるべきでない」と規定している<sup>78)</sup>。貨幣改定はまた社会政策的な見地からも行われ、容量単位の改定まで巻き込んでいる。前述したアダラルは『規則集』のなかで、修道院所領物資の管理に欠かせないこのミュイ単位の改定には明確に触れつつも、同時に制定された貨幣の改定には触れていない<sup>79)</sup>。状況を見ると、9世紀前半のコルビーに造幣を行う部署があったと考えるのは難しいといわざるを得ない。

77) 規則集は、BnFのGallicaで Statuts d'Adalard, abbé de Corbie, etc., IX<sup>e</sup> siècle として、カロリング小文字で記された原本テキストが参照可能である。ここでは刊本テキストとして Levillain, P. 1900, 《Les statuts d'Adalhard de Corbie》, *Le Moyen Age*, t. 13, pp. 333–366を参照した。また、Verhulst, A. et Semmler, B. 1962, 《Les statuts d'Adalhard de Corbie de l'an 822》, *Le Moyen Age*, t. 68, pp. 105–123, 233–269が修道院組織と経営の詳細を検討している。

78) *Capitularia regum Francorum*, t. 1, Nr. 44, p. 125.

79) 前注77参照。

それでは、他の地の「聖ピエール」で有力な候補を見つけることができるかとなると、これもまた困難なのである。結局の所、アダラルの史料を9世紀前半の状況に関わる否定的証拠として採用するにしても、シャルルマーニュの貨幣改革以前のコルビーの貨幣製造までを完全に否定するものではない。むしろ、それまではメロヴィング的伝統の中で「造幣人」として「聖ピエール」の名が刻まれてきていたと見ることも不可能とはいえない。仮にこのように主張してみても、ピピン、シャルルマーニュにいたる一連の貨幣改革の成功、またその後のシャルル禿頭王時代まで続いた王権による貨幣統制の実施を前にして、カロリング家に友好的であったコルビー修道院が自主的に造幣行為から撤退した、と見ることもできなくはない<sup>80)</sup>。

他方、ピピンからシャルルマーニュ、そしてルイ敬虔帝の時代を経て、フランク王権の統制力が漸次的に弱体していったと考えられ、例えば造幣地の数が増える傾向にある。また、品位の低下というよりは重量の低下という形で、貨幣内容自体の悪化が生じてくるのも確かである。この流れは西フランクではシャルル禿頭王の時代に入ると加速こそすれ、とどまることはない。見てきたように、コルビー修道院でもシャルル禿頭王の時代から造幣活動が始まった、あるいは再開されたことは明らかである。しかし、その正確な開始時期を知る術はない。王権からの明示的な権利譲渡文書は後世の写本を含めても一切伝来していないし、おそらく本来よりその種の公式文書は存在しないと見た方が自然である。

この問題に関しては、しばしばドイツ学界を中心に注目される、カロリング朝後期における造幣権・市場開催権・流通税徴収権の三位一体的な譲渡という事象に一言することから議論を始めてみよう。ドゥブリエもまたこの状態を念頭に置いて、シャルル禿頭王治世の最初期である843年、コルビー修道院が近隣ソナム川にかかるデュルド橋（ダウール橋）とそこで徴収される流通税 *vectigal* を、修道院の利益となるよう国王の公的な権利から譲渡された文書<sup>81)</sup>を引き合いに出し、さらにコルビーが所領経済の中心的な市場地であったとの推論を付すことで、840-850年代からの造幣活動の開始を描き出そうとした<sup>82)</sup>。彼はさらに、833年ルイ敬虔帝がコルビー修道院から分岐したコルヴァイ修道院（遠いザクセンの所在！）に対して、修道士たちが食糧を調達できる市場が周囲にないことを理由に造幣の権利を譲渡した文書をも傍証として引き合いに出す<sup>83)</sup>。筆者はさらに加えよう。これだけ遠い事例を出さずとも、同じく北フランスのサン・ベルタン修道院へのシャルル禿頭王による874年の市場開設認可状なども、十分に有力な傍証となるであろう<sup>84)</sup>。

80) カロリング朝によるおよそ1世紀間にわたる貨幣改革の連続性については、巻末の文献一覧に挙げた Lafaurie の諸論文を参照せよ。

81) Tessier 1943, *Recueil des Actes... Charles le Chauve*, t. 1, n° 18, p. 44.

82) Doublier 1963, pp. 287-288.

83) 前注と同じ。また9世紀コルヴァイの政治経済と史料については藤田裕邦1991「西欧中世初期の修道院における所領と市場—コルヴァイ修道院の事例から」『社会経済史学』57巻4号、462-488頁も参照せよ。

84) Tessier 1955, *Recueil des actes... Charles le Chauve*, t. 3, n° 370, p. 324.

しかし筆者は、貨幣を含んだ流通三権の三位一体的譲渡を帝国全体に広げて考える、あるいは一般的な傾向としてみることに同意できない。むしろ10世紀ドイツ王国の特殊な政治情勢や経済環境がそのような事態をもたらしたとみるべきであり、あくまで権利の譲渡や寄進は個々のケースに応じて実施されたのではないだろうか<sup>85)</sup>。むしろ、9世紀から11世紀にかけて公的な諸権利があたかも「分散」し、多数の人物・機関によって担われていく流れは確認できる。しかし、そのすべてが一律にまた同時に起きたわけではないだろう。正式な権利譲渡と不法な権利篡奪の間には、種々の出来事を含んだスペクトラムを想定することができる。

シャルル禿頭王の864年6月25日のピトル勅令の意義をあらためて考えてみよう。この勅令はカロリング朝の貨幣政策の延長線上に位置していた<sup>86)</sup>。シャルル禿頭王は同勅令にて、造幣に携わる者に対する管理の強化（罰則規定を含む）、従来の貨幣や造幣用具の取扱い方を語るとともに、新貨幣の型を指定し、造幣地を数ヶ所に限定する旨規定している。例えば、型に関しては、「我らの新貨幣について、一方の面には、円形の縁に沿って我ら国王の名を刻み、中央部には我らの組み合わせ文字を配するべきこと。他方の面には、中央部に十字架をおいて周囲に（造幣がなされた）都市の名をあるべきこと」（第11章）との定めがある<sup>87)</sup>。このような定めを一言一句厳密に捉えるならば、フランコン貨のような王銘を欠いた貨幣の出現はこの規定の虚しさを露わにするものかも知れない。しかし、ただ単に王銘に代わって別の管理者の銘が刻まれたと理解するならば、他の点はほとんどピトル勅令の定めと変わらない。むしろピトル勅令は爾後のフランス貨幣のおおよその型を定めたものとさえ言える。勅令の指示する意図は基本的には万民に受容されながら、その実践は個々の組織に任されたということであろう。

### おわりに ——フランコン貨の問題に立ち戻りつつ——

フランス中世古銭学界の重鎮J. ラフォリーは、1970年にカロリング朝からカペー朝初期にいたるフランク王国幣制を総合的にまとめた論稿で、コルビー貨の登場をシャルル禿頭時代の国王貨に生じた最初の例外的事件と位置づけている<sup>88)</sup>。いわばピトルの定めに従わない最初の例として同貨を位置づけることで、ピトル勅令体制、もしくはピピン王以来のカロリングの国王管理下での貨幣発行体制の崩れを読み取ろうとした。もともとラフォリーは、ピトル勅令で10箇所そこの地点に造幣行為が限定されたとはいえ、現実にはその10所この

85) 拙稿2011「カロリング朝フランク帝国の市場と流通—統一王国時代を中心に—」拙編『伝統ヨーロッパとその周辺の市場の歴史』清文堂、41-42頁。

86) Lafaurie 1980, pp. 489-496.

87) ピトル勅令の貨幣に関する箇所のテキストは *Capitularia regum Francorum*, t. 2, Nr. 273, pp. 314-316を参照。分析については、注39参照。

88) Lafaurie 1970, pp. 132-133.

公認造幣地にそれまで機能してきた多くの他の造幣地の名前を刻む打ち型がまとめられて、そこで多数の地名を刻む貨幣が管理されて製造されたと理解することで、シャルル禿頭王貨が10地点どころか125もの地点で「製造された」かのごとき現象を説明していた<sup>89)</sup>。この結論は個々の貨幣の両面に見える型の比較分析から導き出されたもので非常に堅固な見解といえる。彼はいわばピトル勅令後における王国による貨幣の一元的統制がしばらくは相応に機能していたと結論したのである。その彼がコルビーの SCI PETRI 銘を刻む貨幣の例外性を云々するのは、やはりそこに国王銘がないからであった。それでは我々はこの貨幣の出現を持って「封建貨」の萌芽と理解するべきなのだろうか。この問いかけに対しては、コルビーのフランコン貨の特殊性について議論をすることで答えの代わりとしたい。

ドゥブリエやデペイロのように「封建貨」云々といった用語を持ち出すかどうかは別として、フランコン修道院長の時代は政治的混乱期であった。887年にシャルル肥満王が廃位され、フランキアの豪族たちによってウッドが選出された時点で、ルイ3世の息子シャルル（後のシャルル3世）は8歳という幼少の身であった。ノルマン人の侵攻に対抗できる王権が望まれる状況であったため、当時名声を博したロベール＝ユグー門の血筋が求められたのである。それでも登位後直ちに豪族たちは反旗を翻し、893年にはシャルルを王位に推す反乱が始まる。内乱状態に陥ったウッドは、897年にシャルルがウッドの後継王となる条件で和を結ぶが、その翌年にウッドが没して、既に王を名乗っていたシャルル3世が単独王となった<sup>90)</sup>。これによってカロリング朝王家が復活したわけだが、しかしもはやこの王権に王国全体の政治経済を統制する術も力量もなかった。貨幣発行の面でもシャルル3世単純王は、911年、カンブレ司教座に「固有の貨幣と固有の造幣人による造幣（貨幣製造）を王の権威により認め」、919年頃にトゥールのサン・マルタン修道院に対しても同じ法行為を行っている<sup>91)</sup>。王権以外の組織への公権の譲渡は確実に進行していったといえる。

コルビー修道院はカロリング諸王の庇護のもとに発展した修道院であったが、9世紀後半の混乱期には支持する王権を見失っていたのではなかろうか。896年に国王ウッドがフランドル伯軍との戦役の途上でコルビー修道院を訪問しているが、年代記からは同年コルビー修道院に周壁が張り巡らされたことがわかる。おそらくは修道院はウッド王に一時期完全に服したのであろう。しかし、まさにその混乱期こそ修道院が貨幣を発行した時代と重なる。そして重要なのは、この時代に製造された貨幣の構成要素が、フランコンの名を刻む点のみを特異点として、シャルル禿頭王の定めたピトル勅令のそれと同一だという点である。片面に

89) Ibid., pp. 119–121. 同様の見解は Lafaurie 1980でも維持されている。

90) この時期の政治状況については、Govry 2005, *Eudes* ..., pp. 137–150 ; Id. 2007, *Charles III le Simple*, 898–929, Paris, pp. 35–72. また佐藤彰一1995「フランク王国」柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編『フランス史1、先史～15世紀』山川出版社、171–172頁。

91) Lauer, Ph. 1940, *Recueil des actes de Charles III le Simple, roi de France (893–923)*, t. 1, n° 238, p. 183: Cambrai (proprium monetam et percussuram proprii numismatis nostra auctoritate concederemus); Id. 1949, *Ibid.*, t. 2, n° 101, p. 238: Saint-Martin de Tours. Cf. Prou 1896, n° 439.

人物とモノグラム、もう片面に地名と十字架、という構成がそれである。コルビーはまさしく地域の安寧を司る一つの組織として、ピトルの原則を広義に解釈しながら運用していた、と見ることはできないだろうか。時には国王の名、時には修道院長の名を冠した貨幣を製造することで、あるべきカロリング家の統治の代行をしていたのではないだろうか。これまでのフランス古銭学・貨幣史研究の伝統は、発行者が国王から他の領主権者に代わるとき、国王貨から封建貨への変化、あるいは貨幣の墮落を語ってきているが、そのような割り切り方で9世紀後半の貨幣発行状況を正しく捉えることができるのか、コルビーの事例は我々に問いかけている。

ウッド時代に建設された周壁と城〈castellum〉は901年に新王シャルル3世によって追認され、その後903年には教皇からも勅書で認められる<sup>92)</sup>。この頃になってコルビー修道院での貨幣発行は止むこととなる。シャルルを名乗る新国王に修道院は再度の安定を求めたのかもしれない。しかし、頼みのシャルル3世は諸侯の反乱に敗れて924年以降幽閉される<sup>93)</sup>。修道院が固有の貨幣を発行することもその後は見られない。以後、コルビーでの造幣行為を確認するには、11世紀半ばを待つしかない<sup>94)</sup>。

最後に、貨幣史の叙述が正確な貨幣情報を基礎になされるべきことは言うまでもない。しかし、その作業はきわめて不安定な知見の上でしかなされえない、というのもまた真実である。この絶え間ない作業の妙をあえて指摘することで、本稿を結ぶこととしたい。

## 【追記】

本稿は、平成30年度科学研究費補助金研究、基盤研究(A)一般：課題番号16H01953、研究課題「前近代ユーラシア西部における貨幣と流通のシステムの構造と展開」（研究代表者・鶴島博和）にもとづく研究成果の一部である。

---

92) Levillain 1902, n° 37, pp. 295 – 299; n° 38, pp. 299 – 301.

93) Govry 2007, *Charles III le Simple...*, pp. 129 – 135, 145.

94) Poey d'Avant, F. 1862, *Les monnaies féodales de France*, t. 3, Paris, p. 358, pl. CLII n° 14 et 15; Bompaigne et al. 1998, pp. 299 – 301.



## コルビー修道院中世初期貨幣史に関する主要文献

(本文で引用した一次史料文献、他の関連二次文献はここでは省いている)

- Bompaire, M., Clairand, A., Prot, R. et Guerra M.F. 1998, 《La monnaie de Corbie (XIe-XIIe siècles)》, *Revue numismatique*, t. 153, pp. 297–325.
- Bruand, O. 1998, 《Circulation monétaire et pouvoirs politiques locaux sous les Mérovingiens et les Carolingiens (du VIIe au IXe siècles)》, Société des Historiens Médiévistes (éd.), *L'argent au Moyen Age*, Paris, pp. 47–75.
- Bruand, O. 2002, *Voyageurs et marchandises aux temps carolingiens. Les réseaux de communication entre Loire et Meuse aux VIIIe et IXe siècles*, Bruxelles.
- Caron, E. 1982, *Les monnaies féodales françaises*, Paris; réimp. Bologne, Forni, 1974.
- Castellane de C. 1900, 《Denier de Corbie au type de Louis le Bègue》, *Revue numismatique*, t. 4, pp. 435–438.
- Castellane de C. 1916, 《Observations sur le monnayage de Corbie au IXe siècle》, *Revue numismatique*, t. 20, pp. 193–213.
- Cousin, Dom P. 1963, 《Les origines et le premier développement de Corbie》, *Corbie, abbaye royale. Volume de XIIIe centenaire*, Lille, pp. 19–46.
- Dieudonné, A. 1936, *Manuel de numismatique française, t. IV, Monnaies féodales*, Paris, 1936.
- Doubliez, P. 1963, 《Le monnayage de l'abbaye Saint-Pierre de Corbie》, *Corbie, abbaye royale. Volume du XIIIe centenaire*, Lille, pp. 283–310.
- Depeyrot, G. 1993, *Le numéraire carolingien. Corpus des monnaies*, Paris.
- Dom Grenier 1910, *Histoire de la ville et du comté de Corbie, des origines à 14<sup>e</sup> siècle*, Amiens.
- Duplessy, J. 1985, *Les trésors monétaires médiévaux et modernes trouvés en France*, t. 1, 751–1223, Paris.
- Fossier, R. 1968, *Terres et hommes de Picardie*, 2 vols., Paris/Louvain.
- Ganz, D. 1990, *Corbie in the Carolingian Renaissance (Beihefte der Francia 20)*, Sigmaringen.
- Gariel, E. 1883, *Les monnaies royales de France sous la race carolingienne*, Strasbourg.
- Lafaurie, J. et Duplessy, J. 1962, 《Numismatique》, Société des antiquaires de Picardie, *Les trésors de l'abbaye royale Saint-Pierre-de-Corbie*, Musée de Picardie, Amiens, Exposition, 6–24 mai 1962, *Bulletin trimestriel de la société des antiquaires de Picardie*, Amiens, pp. 45–47.
- Lafaurie, J. 1970, 《Numismatique. Des Carolingiens aux Capétiens》, *Cahiers de civilisation médiévale*, t. 13, pp. 117–137.
- Lafaurie, J. 1980, 《La surveillance des ateliers monétaires au IXe siècle》, W. Paravicini et K. F. Werner (Hg.), *Histoire comparée de l'administration (IVe–XVIIIe siècles). Actes du XIVe colloque historique franco-allemand de l'Institut Historique Allemand de Paris (Beihefte der Francia, 9)* Munich, pp. 486–496.
- Levillain, P. 1900, 《Les statuts d'Adalhard de Corbie》, *Le Moyen Age*, t. 13, pp. 333–366.
- Levillain, L. 1902, *Examen critique des chartes mérovingiennes et carolingiennes de l'abbaye de Corbie*, Paris.
- Metcalf, D. M. 2006, 《Monetary circulation in Merovingian Gaul, 561–674. A propos des Cahiers Ernest Babelon, 8》, *Revue numismatique*, t. 162, pp. 337–393.
- Morelle, L. 2011, 《Les évêques d'Amiens et l'abbaye de Corbie jusqu'au milieu du XIe siècle》, *Bulletin de l'Association des amis de la cathédrale d'Amiens*, 2011, p. 5–13.
- Morrison, F. and Grunthal, H. 1967, *Carolingian coinage*, New York.
- Poey d'Avant, F. 1862, *Les monnaies féodales de France*, t. 3, Paris; rééd. avec mise au jour de G.

Depeyrot, Paris, France, 1995.

Prou M. 1892, *Les monnaies mérovingiennes. Catalogue des monnaies françaises de la Bibliothèque nationale*, t. 1, Paris.

Prou, M. 1894, 《Essai sur l'histoire monétaire de l'abbaye de Corbie》, *Mémoires de la société des antiquaires de France*, t. 55, pp. 71–98.

Prou M. 1896, *Les monnaies carolingiennes. Catalogue des monnaies françaises de la Bibliothèque nationale*, t. 2, Paris.

Rouche, M. 1973, 《La Dotation foncière de l'abbaye de Corbie (657–661) d'après l'acte de fondation》, *Revue du Nord*, t. 53, pp 219–226.

Vercauteren, F. 1934, 《L'interprétation économique d'une trouvaille de monnaies carolingiennes faite près d'Amiens en 1865》, *Revue belge de philologie et d'histoire*, t. 13, pp. 750–758.

Verhulst, A. et Semmler, B. 1962, 《Les statuts d'Adalhard de Corbie de l'an 822》, *Le Moyen Age*, t. 68, pp. 91–123, 233–269.